



パーキンソン病のくすりと うまく付き合っていくために

- くすりは主治医または薬剤師の指示に従って、正しく飲みましょう。
- くすりをいつ、どのように飲んだかを手帳やカレンダーに記録すると、飲み忘れが少なくなります。
- 長期にわたってくすりを飲んでいると、気になることが出てくることもあります。
 - 飲み始めた頃にくらべ、くすりの効きが悪くなった
 - 症状が、1日のなかで良くなったり悪くなったりするようになってきた
 - 飲み始めた頃にはなかった症状が出てきたこれらの症状がある場合、まずは主治医に相談しましょう。
- くすりについて気になることや、症状で何か気付いたことなどがあれば、主治医または薬剤師に伝えましょう。



パーキンソン病と上手に付き合う

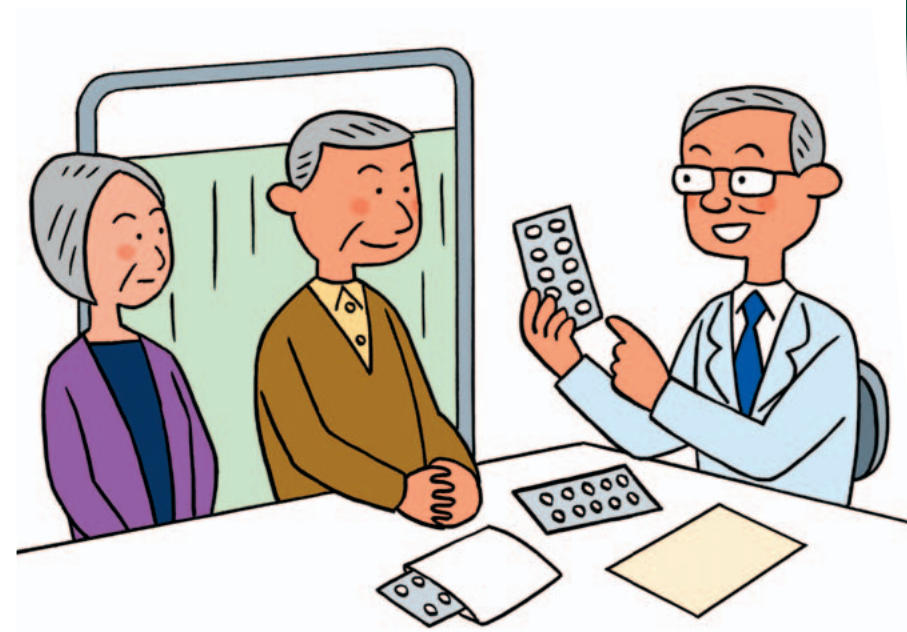
監修：古和 久幸 先生（北里大学 名誉教授）

長谷川一子 先生（独立行政法人国立病院機構 相模原病院神経内科 客員医長）

2号

パーキンソン病の 治療

～薬物療法について～



くすりによる治療

パーキンソン病の治療は、
くすりによる治療が主体となります。

くすりによる治療は、症状を軽くして、日常生活を過ごしやすくすることをめざすものです。

くすりによる治療をしっかりと続けることで、症状を改善することが可能で、健康な方とほぼ同じように生活することができます。



くすりを飲み続ける期間が長いため、できるだけ長期間にわたりくすりが効くように、また副作用が少ないように主治医は処方を工夫します。

パーキンソン病のくすりによる治療では、何種類かのくすりを飲むこととなります。それぞれ作用が異なるので、主治医は患者さんの症状に応じて適切なくすりを選んでいきます。



くすりを長く飲み続けていると、副作用が出ることもありますが、さまざまな工夫により軽くすることも可能です。主治医または薬剤師の指導に基づき、しっかりとくすりを飲み続けることが大切です。

くすりについて気になること、わからないことがあれば、主治医または薬剤師に気軽に相談するとよいでしょう。

病気と上手に付き合っていくためには、あなたが飲んでいくくすりについて、理解を深めることも大切なことです。また、くすりによる治療と併せて、運動などのリハビリテーションを積極的に行うことも欠かせません。



主な治療薬

パーキンソン病の治療に使用される基本的な薬剤として、9種類の薬剤があります。

◎L-DOPA

パーキンソン病患者さんの脳内ではドパミンという物質が不足するので、ドパミンを補充します。パーキンソン病の治療において、最も基本となるくすりです。
(詳しくは6・7頁へ)

◎ドパミン放出促進薬

ドパミンの放出を促進します。

◎ドパミン代謝改善薬

ドパミンを分解する酵素の働きを抑え、ドパミンを長持ちさせます。

◎アデノシン抑制薬

パーキンソン病によるドパミン不足により、アデノシンによる運動機能低下作用が強く現れます。その作用を抑制し、患者さんの運動機能を改善するくすりです。

◎ドパミン量増加薬

ドパミン量増加、ドパミン放出増加、ドパミン代謝改善などにより、パーキンソン病症状を改善すると考えられています。L-DOPAにほかのパーキンソン病治療薬を加えて治療しても効果がない場合に、L-DOPAと一緒に使うくすりです。

◎ドパミンアゴニスト

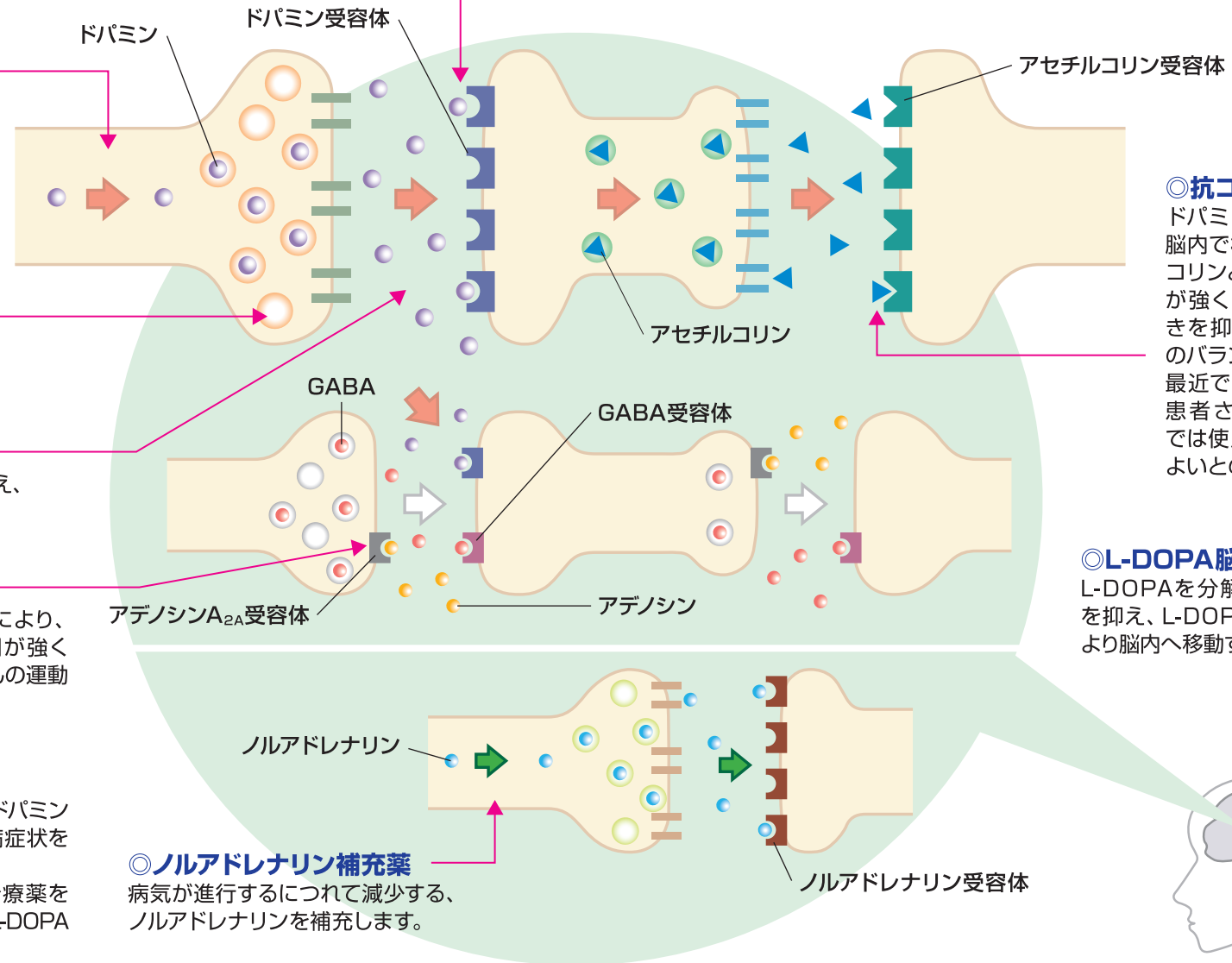
脳内でドパミンを受け取る部分（受容体）を刺激して、働きをよくします（ドパミン受容体刺激薬ともいわれます）。
(詳しくは8・9頁へ)

◎抗コリン薬

ドパミンが減少すると、脳内で相対的にアセチルコリンという物質の働きが強くなるので、その働きを抑えて、ドパミンとのバランスを保ちます。最近では、認知症のある患者さんおよび高齢者では使用を控えたほうがよいとの報告があります。

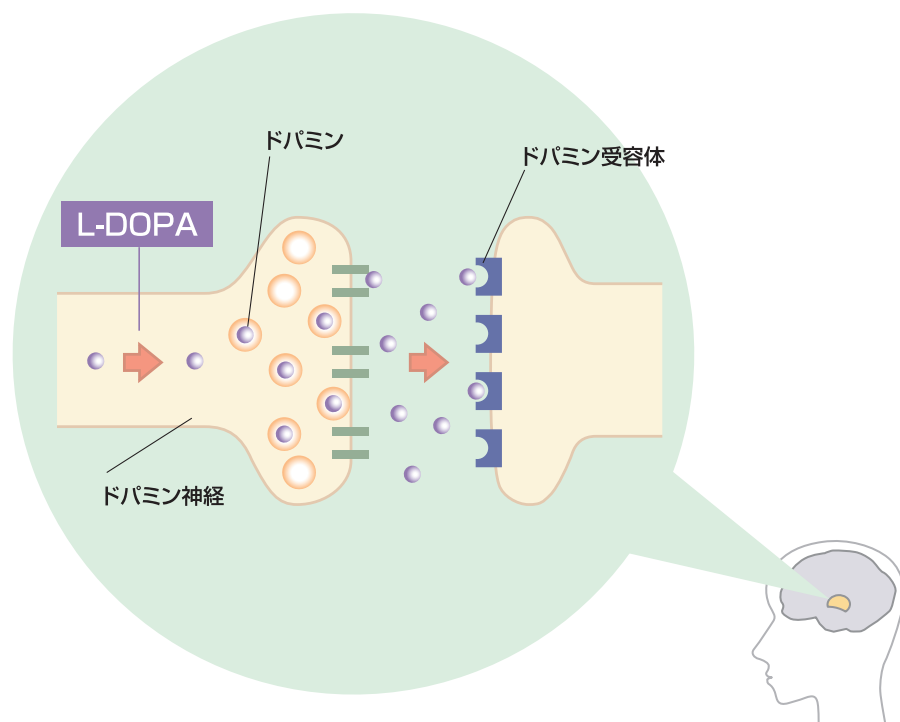
◎L-DOPA脳内移動補助薬

L-DOPAを分解する酵素の働きを抑え、L-DOPAを長持ちさせ、より脳内へ移動するようにします。



L-DOPAについて

パーキンソン病患者さんの脳内で不足しているドパミンを補うくすりで、運動障害の症状を改善します。L-DOPAはパーキンソン病の治療において、なくてはならない重要なくすりです。



L-DOPAの副作用

おなかが張る、食欲低下、吐き気、頭痛、ジスキネジア（不随意運動）、幻覚、妄想などがあります。

L-DOPAの服用について

- ・ L-DOPAにより脳内で不足したドパミンを補うことで、ふるえ、こわばりなどの症状を良くし、スムーズに身体を動かすことができるようになります。パーキンソン病の主な症状である運動障害の症状改善において、効果的なくすりです。
- ・ かつては、症状を良くするために多めに使われていましたが、くすりの効いている時間が短くなったり、手足が勝手に動いてしまう症状（ジスキネジア）が出るなど、問題が生じることがわかってきました。最近では少なめに使われるようになり、くすりの飲み方を工夫するなどして、これらの問題も少なくなっています。



ご相談下さい

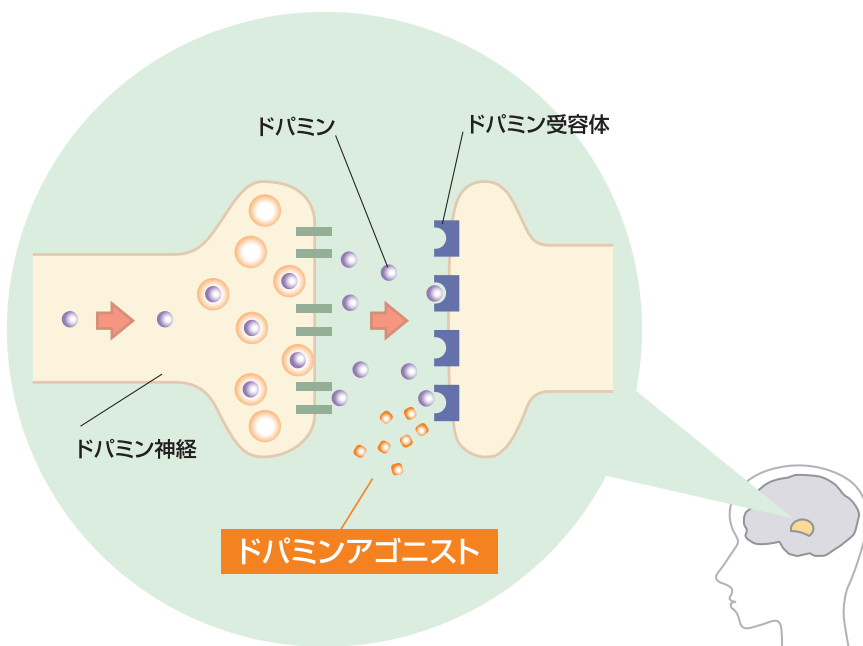
L-DOPAを長期間飲んでいることにより、起こってくる症状がいくつかあります。

- ・ **wearing off現象**：くすりの効いている時間が短くなり、症状が1日の中で変動する
- ・ **on-off現象**：突然症状が良くなったり、悪くなったりする
- ・ **ジスキネジア**：身体が勝手に動いてしまう（不随意運動）

これらは、くすりの飲み方を工夫したり、別のくすりを追加することで症状を改善することができるので、症状に気付いたら主治医に相談しましょう。

ドパミンアゴニストについて

ドパミン神経から出たドパミンを受け取る部分（ドパミン受容体）を刺激して、その働きを活性化します。くすりの成分を徐々に溶かすことで効果を持続する徐放性製剤があり、1日1回の服用/貼付で治療を行うことができます。



ドパミンアゴニストの副作用

吐き気、悪心、食欲低下、眠気、突発的に眠る、めまい、幻覚などがあります。特に、飲み始めの時期に、吐き気や眠気がありますが、しばらくするとこれらの症状は軽くなり消えることが多いので、くすりの量の調節や、食事の途中で飲むなど、飲み方の工夫が必要となります。

ドパミンアゴニストの役割

- ・パーキンソン病の全般的な症状に効果的です。
- ・L-DOPAで治療を開始する場合とくらべてwearing off現象などが生じる頻度が低く、また現れる時期も遅くなります。

パーキンソン病のものさし

MDS-UPDRS

(Movement Disorder Society- Unified Parkinson's Disease Rating Scale)

1987年にパーキンソン病の客観的な評価法としてUPDRSが発表され、治療効果判定、調査、研究、日常診療など様々な場面で使用されていました。2008年、非運動症状が追加され、また、より軽症な患者を詳細に評価できるようにMDS-UPDRSへと改訂されました。4パート、全50項目質問の回答を得点化し、病気の程度を表す方法です。どのような症状がどの程度出ているのかを調べる、パーキンソン病のものさし（評価尺度）と言えます。各項目を0～4の5段階で評価し、障害が重いほど高得点になります。

■ MDS-UPDRSの4パート

- | | |
|-----------------------|--------|
| パートⅠ：日常生活における非運動症状 | (13項目) |
| パートⅡ：日常生活で経験する運動症状の側面 | (13項目) |
| パートⅢ：運動症状の調査 | (18項目) |
| パートⅣ：運動合併症 | (6項目) |

パーキンソン病進行のものさしとしてはホーン&ヤール重症度があります。(ホーン&ヤール重症度については1号[パーキンソン病について知る]をご覧ください)



そのほかの治療薬の副作用について

L-DOPA、ドパミンアゴニストのほかにも、いくつかの種類のくすりが使用されます。各くすりには、飲み始めやしばらく飲み続けてから出る副作用があります。

ドパミン放出促進薬

足のむくみ、皮膚の網の目状の赤い斑、幻視、不眠、イライラ、めまいなどがあります。

ノルアドレナリン補充薬

吐き気、食欲不振、頭痛、幻覚などがあります。

抗コリン薬

口の渇き、便秘、尿が出にくいなどの自律神経症状、幻覚、せん妄などがあります。

ドパミン代謝改善薬

L-DOPAの作用を強めるので、基本的にL-DOPAと同じ副作用です。

ジスキネジア、起立性低血圧（立ちくらみ）、幻覚、妄想、せん妄などがあります。

L-DOPA脳内移動補助薬

L-DOPAの作用を強めるので、基本的にL-DOPAと同じ副作用です。

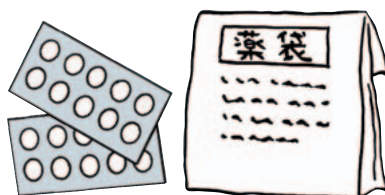
ジスキネジア、悪心などがあります。また、害はありませんが、くすりにより尿が褐色になります。

ドパミン量増加薬

眠気が現れます。

アデノシン抑制薬

ジスキネジア、便秘、幻視などの幻覚などがあります。



副作用解説

幻覚：実際にはないものが見えたり、聞こえたりすることです。

妄想：事実と異なった観念、信念にとらわれてしまう症状です。

せん妄：錯覚や幻覚が多く、軽度の意識障害を伴う状態です。



ご相談下さい



L-DOPAを長く飲んでいると、くすりの効きが短くなり、1日のうちで症状が良くなったり、悪くなったりすることがあります（wearing off現象）。この現象は、L-DOPAを含めそのほかのくすりの飲み方の工夫やくすりの追加により改善されるので、症状がみられるようであれば主治医に相談しましょう。

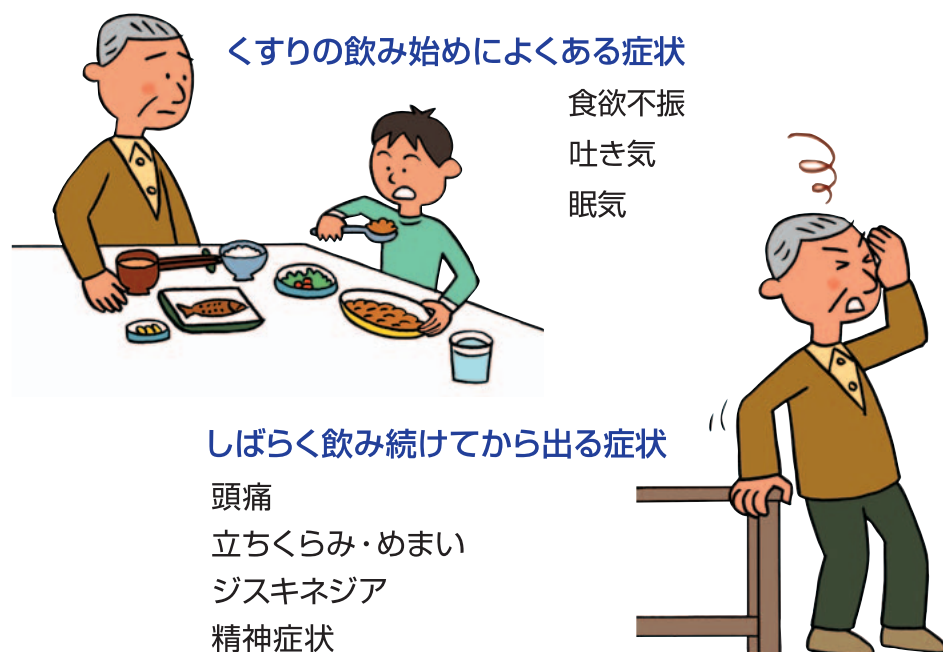
服薬にあたっての注意（１）

くすりを飲んでいて気になることがあったら、
気軽に主治医または薬剤師に相談しましょう。

くすりの副作用について

くすりの副作用の症状が気になる場合、主治医または薬剤師に相談しましょう。
副作用のためのくすりが処方されたり、今飲んでいるくすりを調節することなど
があります。

また、ほかの病気が原因であることも考えられるので、主治医または薬剤師に
しっかり説明するとよいでしょう。



くすりの服用の中止について

自分の判断で勝手にくすりの服用を中止してはいけません

くすりの服用を勝手に中止すると、ごくまれに高熱、意識障害などの症状が出て、
入院が必要となることがあります。くすりの服用を中止する前には、必ず主治医と
相談してください。

このような症状が出るかもしれません

急にくすりの服用を中止することで、高熱、意識障害、筋肉のこわばり、全身のふるえ、ジスキネジア、激しい発汗による脱水症状、ショック状態などが起こる可能性があります。

家族の方へ

高熱や意識障害などの症状が出た場合には、至急、主治医に連絡してください。

飲み忘れのないように

くすりを決められた通りに飲むことで、症状が改善されより良い生活が送れるようになります。くすりの飲み忘れ、飲み間違いがないように、手帳やカレンダーに毎日記録して確認することをおすすめします。

また、家族の方にも、どのようにくすりを飲むのか、理解しておいてもらいましょう。

服薬にあたっての注意 (2)

くすりについては、自分で判断せずに、
わからないことがあれば主治医または薬剤師に相談しましょう。

くすりの量の調節について

くすりの量は自分で勝手に調節してはいけません

主治医は患者さんの症状に応じて、十分に考えた上でくすりの量を決めます。患者さんが勝手に量を変えてしまうと、予期せぬ副作用などが生じることもあります。

絶対に、量の調節は行わず、主治医または薬剤師の指示通りにくすりを飲んでください。



くすりの飲み方の工夫

パーキンソン病患者さんでは、くすりが飲み込みにくいことがあります。

飲みにくさを感じる場合は、まず主治医や薬剤師に相談し、飲み方の指導を受けるとよいでしょう。

ほかの病気のくすりについて

- ・胃腸のくすり、高血圧のくすり(血圧を下げるくすり)、幻覚・妄想のくすりの一部には、パーキンソン病の症状を悪化させるおそれのあるものがあります。
- ・すでに、きまって飲んでいるくすりがある場合には、一度主治医または薬剤師にくすりを確認してもらいましょう。
- ・市販薬やサプリメントについても、主治医に確認してもらいましょう。



ほかの診療科を受診する場合

- ・事前に主治医に相談しましょう。
主治医に現在飲んでいるパーキンソン病のくすりの種類を明記した紹介状を書いてもらうとよいでしょう。
- ・ほかの診療科の医師には、必ずパーキンソン病のくすりを飲んでいることを伝えましょう。

